若根七湯琴

六

ル 4
1124
6

1124
6

宮城縣立図書館

箕根七湯藁巻之六

底倉の部

目録

一湯病並効驗
一底倉全圖
一石風呂の譜
一同全畫
一痔漏灸治図 並灸治スエ方心得ホ
一小地獄嵩の図
並古哥及鷹取ヶ古哥

伊東氏藏

湯宿四軒

梅屋又右エ門　　萬屋平左エ門

住吉屋源右エ門　　萬屋伊兵衛

効験

痔疾　淋病　疝気　中風　帯下　撲身

疾　頭痛　痛風　消渇　寸白　血塊

宮の下堂ヶ島あり底倉の一名わく想谷底

倉村なり能中に湯あり所に地方にて四辺岩窟

書こ久保むしろ宮輩たりしとうろ

弯の泉の秀嶺ろ時を激し若八幡の源

渓のそむり魂を花に柿この宮門や緑樹翠

して四方渓の中岩穴ゆ水青のこ久ゆ

石底ケ谷の石も又経ろ谷の泉山

ろ天正の比小係氏亜の中お城とろへ而て

今ろ四又天の古石の沿ろ又坂穴ろ人而も

ろ大ロ谷大能山のろの方にて性宮川也

ろ底倉より木賀芦の湯への道四丁ろ東左

あり三筋ろ流ろ川ろ菱の沿多立ての渡六の

川の急ろ氣の岸ろあろ古人たまろ

者ろ四ろ辺ろ陀宮縣ろ出ろ又柵

の体ろ不ろ西三十間ろの不の岩

根乃絡ろ丈ケ七天中三天北ケ場穿ち楽ろ場入

ろ水ろ出ろ世陽痔ケ切ろ中戻ろ

初ろ者ろ小性ろ者ろたびび常ケ来ろ沿

ろれろや自然ろ人ろ和ろ大ろけ沿

又は地ろ刑ケ井戸ろ安ケ家毎ケ清ろと

[illegible]この清水は座禅の上人の建常泉寺と
いふ寺のわきをながれ宮の下のかうへおつる清水と
貴布禰[illegible]流れ出る泉ゆへ常の竿作
中[illegible]のものと水はいとけ[illegible]つるなるれ
[illegible]冷なる泉なり
又この石垣を南へ狭く東西へ長くして宮の下
[illegible]町[illegible]実[illegible]自然なりのを
彼石垣[illegible]のさま[illegible]
洞[illegible]その外云う諸[illegible]師髪ゆひ[illegible]日毎[illegible]
湯客ども別[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

任なれ[illegible]
[illegible]

是より本道
車屋の方へ
出る袖スリ
石モ此上すり

大閤石八呂道

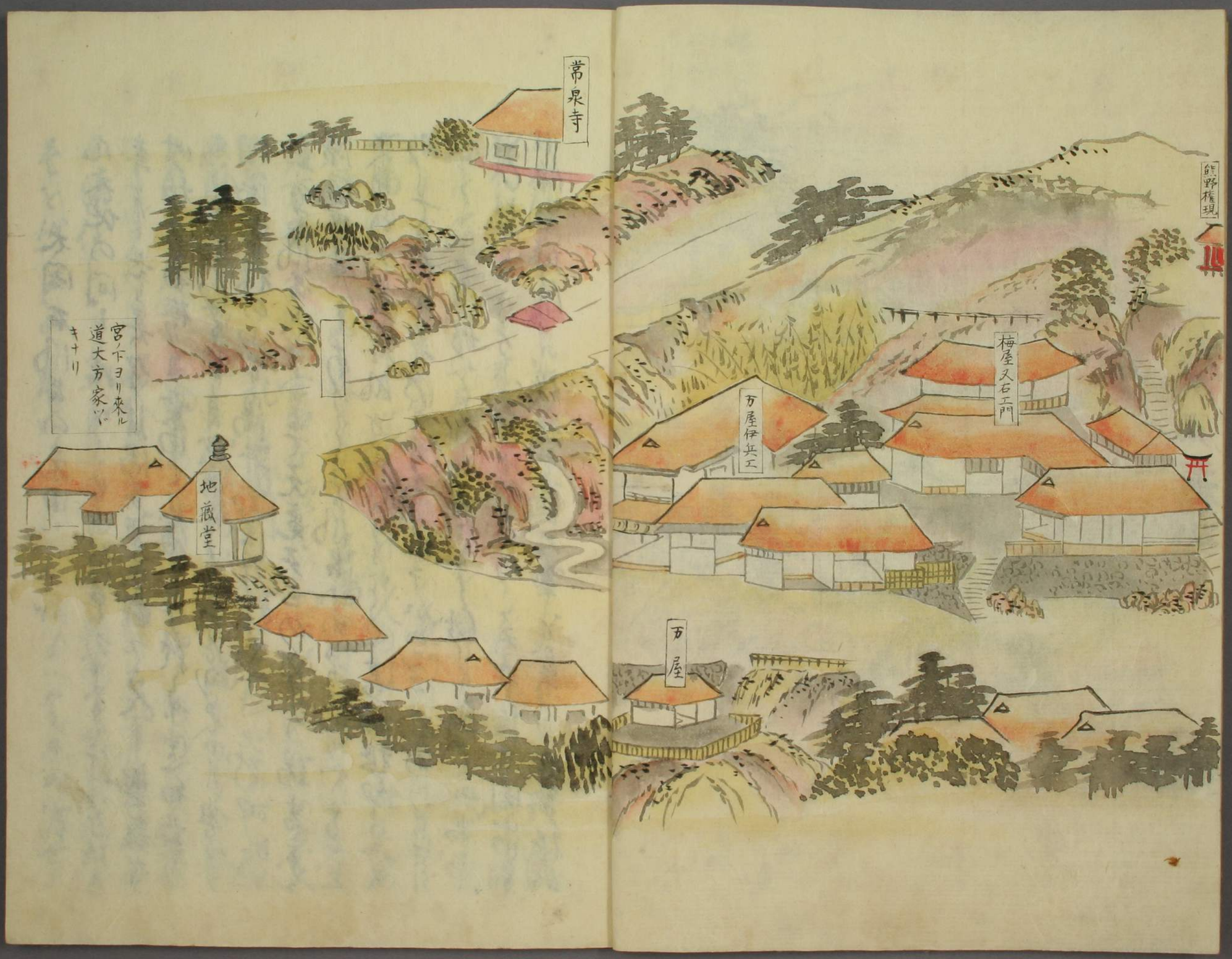
住吉源兵門

蔦屋

蔦屋平左エ門

蔦屋

惣湯


常泉寺
宮ノ下ヨリ來ル
道大方家ヅヾキナリ
地藏堂
熊野權現
梅屋久右エ門
方屋伊兵エ
方屋

太閤石風呂の来由

元天地の間に始りしより年月を重ね人王廿代
村移りて物換り星移り世の変りたるのみにて
相陽箱根の山中湯井沢中底
倉の石風呂といへるは元亀天正の頃より湯治客が
後疲弊戸に入りて丈夫の大岩屋風呂と云ふ
小して後に赤湯と名づけ一まんの岩まくらの下
形ち風呂の形をなし世をとりびく御戸の湯也
いひ伝へうるふ天正十八年のころ豊太閤小田原
小原を討ての後数十万の大軍を率へ北条根山

小屋に居れども物中暫を堪へてこれ防戦に
殿下の幣京大軍なれども敵を両陣持
して中り殿下一日股肱の臣を率へて石風呂に
治しのぶまりて太閤石風呂の名所に志しまりて
箱陽のいさりしも和之人の彩いろ神を感
を傍の談しも丈くり代々名湯の効へ言うまでも
後百年余の昔天和を経て一つの山中や実の東大
ひとしきりひとしきりに山岳嶮岩を隔世この時彼
石風呂所の所なりも山麓高いつくり踏もあり人家を
まじをうくり石風呂あり所に所の方(後の
しくうくり惜へきい世間名湯の石風呂(殿下
の偽住しにくく年しり変又百有余年之村民
是を然るに年のくいへ今日の浴世小

うちは又八自己のかりに及ばざるとして四隣を尋ね
ましかども文化八辛未の年湯を安養寺に
伊勢屋又右衛門方へ移し高野熊野相模沢乃
右養と成し院内の谷底なる四尺の大岩の
かたわらを穿ちて湯殿を設け
彼方へ引入れ断崖絶壁ふかく
再び彼方へ帰りかの滝を用ひ旦行沈たる為
とり引幸して深淵を穿ちて岩門を開き
てこれを滝口より湯殿の横へ温泉殿と
唱へし新しくして不止乾泉の志ぶき湯の烟と
混合し蒙霧なる谷底出滝の音のこと更人語をいか
ばかりこの所絶たるもむべ而も湯殿の傍らに
一本雄滝あり高さ何といまだ大なる岩四の下

にて流れ出でたる湯の流
れの形ありこれを行さう自然をしば
とて九石二丁三丁河中一所のみ
石とすり彫りうる形ちこれで三ヶ所自然
に出たるを人力と称し仏を刻し牧の石をもって流
とあること岩上に苔蒸して
て養も笠もはるばるとひらひらと
力及ばざれば先の孫出せしをとゆひこの上
も先の人力成りて塔婆さえ白い石をうりぬ
この日十六人を使ひ牧の大石を塔
おさんとせれども不成又の日人を信ず彼方へ
牧の大石をうつして面の中に牧山風呂の形と
こうく大なる自然石を九中ふ石に添さ

の湯槽のもとに湯の湧あるを繰りされいさを寒之
の湯盃をうけてそそぎ行者雅而なる遠行
て帰りぬまづ住吉神社をかへりて匂りさき
ぬ〳〵歩行して夜ひるの御ものも儀式いまさ
市と茶花いろ〳〵茶七湯の西国ちうんとさる人の
祈りれいれそのもの毒しくせもく祈しも山市市
有〳〵の故而のもれ彼風呂のもの汚りうちひの又
もも洋さ書初しさきさ怒動くいつそさ明日
ぬそ彼而〳〵ぬん〳〵次の日之人〳〵茶円させて彼ちか
のこ〳〵の絶而りて遠つちをといへん尚九折の絶と
おちる氏小垂〳〵たより篠を飾けれ〳〵宿をより
谷川をめりてい一人先〳〵親之〳〵もとのれい一人的よ
子腐をはさ〳〵巌の上をつちひれ〳〵を巻のちん

方能〳〵御〳〵彼而にうちうれい来ぬと之のう
ぬ年万若思ひ中れぬ〳〵此谷の中なる而〳〵
彼の彼石垣中〳〵のもの絶れ〳〵実〳〵や右岡の匹まち
き〳〵て下とあるせ〳〵往のひうの廊風かる
絶而の彼〳〵来〳〵れ行おひあされて帰し来
以而ま来りて志〳〵岡を横〳〵之おう中長宴後の
功功あけをあ〳〵南〳〵を求りの〳〵

原吉大キサ 安渡七人横九人往原り二人平行なり
岡なりこぶ状

水源蛇骨川
洞
柵ノ沢

此三筋ノ石穴ハ湯ノ出ル所
石風呂

栂の沢と云ハ蛇首川の西流中ゝ度食の谷底石風
呂の後ゝなりしは而方七分もしくべき流関とて溪
谷より湯と水を蓋のごゝ寄めゝ物凄き所
なりをは雄美あつゝ三の頂めゝ三丁交余
の概の大木と成しゝ湯ゝ流れて義し　この栂の沢
ゝ落入つゝめゝ枝中しゝ三丁度
は而大ひゝ降つゝき蛇首川の水流つゝ　対岸ゝ
し城而のゝ九ゝ三丁とて了流門の
岸辺ゝ引ゝ三せあ雪まの高ゝ二丁板ゝ三ゝ
ゝ栂の沢ゝ三ゝ大ハ性者は関ゝ大流ゝ
人馬を頂き村長ゝ知をつゝ三ゝ栂ゝ
ゝ三ゝ退せゝ三ゝ文ゝ三ゝてこの関ゝ三ゝ名
付ゝ義

又石風呂なる向ひの岸いゝ不の湯ゝ三ゝ長サ六尺
横巾三尺深サ自然石細ゝ那ゝとゝ中
ゝ湯烟のゝ不ありゝゝと大流の湯ゝ云ゝて
焼湯のゝ三ゝ云ゝ右の大流の入ゝ湯ゝ云ゝ
来ゝ三ゝ三ゝこの不ハ二丈余の谷底ゝて岸風を立
あゝ三ゝ三ゝ経堂のゝ三ゝ人倫の如ゝ三ゝて
伝説ゝ極ゝ三ゝ人倫と也　仝方なし
一ハ湯府と蒸ゝ三ゝ家ゝ功ゝ少ゝ家ゝ
湯壺のゝ元ゝ三ゝ三ゝ来ゝ三ゝ
大祭藤樹ゝ三ゝ九ゝ三ゝ九ゝ三ゝ
ゝ三ゝ其元の上ゝ孔門とゝ三ゝ　但ゝ也
ゝ三ゝ先ゝ川ゝ三ゝ湯ゝ入
ゝ三ゝゆゝ三ゝ後ゝ三ゝ流ゝ

穴をうがち一すんばかりなる丸く鍋の形ちと作りまた
おのゝ孔門をもうけ下のもるゝ多処
しかして炭はそれをうつる陽気をうけて却て孔門を
焼くるかのごとく迷て発生する時を陽気をうけざる
あるときは表面をうすく紙をもつて戸棚風呂とあるも
また梅やとゝ以ふ陽病に用ゆる元方なり百の元方
療をもむ分用ゆるを中ごろ世にいたりてもが
益をれば病もつくかのごとくなり世にいたりてもが
百度といへる部の色療を療をとうとあるを庵あるを
陰陽の庵と名つけまた一百いまとり落るる常のぬく
一百八ばかり吹ものの元門四方なり外その庵は孔門
とかしかのごとくうるとうるとあるを
色まる用ゆるあり湯病たつねてもるべし

一療を交治するのいにはかの陰陽の各医何来るの地より来
るるはこの療風呂あるをもるゝ湯病の義より発治の
事を伝史氏旦山市と号れ文京をとりたるもづ
色を製しかの文をうる病者毎を忘れるの病風呂
庵湯るゝ治しかのごとくさもこの発るを療るの迷なり
背なるうの療さりまさしく陰陽りいうりて意ふ
彼医を取主ごを色文をもつてその行あをもるゝ色偏り
仙術なる発のいとゝうるふとして男世の孫ゝつゝ
今行部ゝ発治す
一療を交主のるるの指り艾りて一度りみ十みをう
つすゆるは艾を火とうつしてふサき竹の管をて
一島つを吹切るを高のつき中りを光れも文京
をるゝ一島つを吹切中へその島の男をるゝゆる

故に却て法をたすけ四大調和せざる時は灸治をもつて主とし薬を用ひて是あれども
灸治をもつて主とせざる時は薬をもつて主とす
薬のかたちなど様々にして人もあれども灸治よりいのちを
ながらへたる人もあるべし
灸治の術をなすに初て灸例をもつて固の
ごとく指し貫くべきなり
病ふかくして大抵二回にて灸治をもれば全快せしめ
なし艾蒸又蓬陽の医の伝授を得て製をなす
功能他に比べなく次角もまされり
ものを大抵陽者のいのちなり
艾蒸をもつて面部ふせをもつて製し色白く
他に知なり
世外土府脂肪をもつて灸治者を求り食物の禁忌

あるべし病者をもつて陽者に準ずべし
灸治をもつて一日置て毒をもつて洗ひ去べし
つまり紅所菜ホをもつべし
底金の如く車屋の毛布
うつ様にて菜者の白汁
ホ小さく成ばやう菜の花
灸例

梅乃屋

梅乃屋灸治をもつて
おのづから山のあるがごとく立雲の少もうつ又暮雲
蛇骨門の流れ出て
いくとも疲れなくの花
しひのもとあめやふ東内をもれ中添
秋ちるき苔の色の清屋にて春の更りをもつて

菊花

隆朝

明神嶽
出山
二ノ平
底倉道
小地獄山ノ図
スヘテ十四五ヶ所
閻ノ地蔵
観音ノ石像
雪庵嵐雪

座敷の市中より芦の湯へ行道の右の方より小
径と入る凡五十丁ばかり山地獄山の中腹に出る
泉のほとり地蔵観音同所の石像あり更に登る
二三丁ばかりにして巌の穴より湧出る湯
ふかさ凡十四五間中ほどにつるべ百二十余
の井戸あり其水体色硫黄ホの石
あるいは地獄とも云へり
西の方乾の方に嶽蓮華寺本賀寺
小田原山辰巳の方に嶽の泉山ひつじさるの方
芦の湯二子宝蔵ヶ嶽
きさい角にて陸に小田原市
むひのふ清左衛門殿なる人
ものを求るさまべい社湯
ひとへに山さえ〳〵木魂ひびき横湯凝り
火気を生ず山腹より硫黄となる是温泉乃
源なり山四の方に芙蓉を表して惡硫黄の気
湯師いう所所をえらぶ
高くとそかに而して
くぐるに出ずいつくふ出ずや文
梅ヶ谷横州宮の姫湯
に国花万紫紅といふ
十年伊豆河内守いへふ
さるに
共底口のもの
すその浅橋戸国の人
名を
ひとへに山さえ〳〵木魂ひびき横湯凝り
火気を生ず山腹より硫黄となる是温泉乃
源なり山四の方に芙蓉を表して惡硫黄の気
湯師いう所所をえらぶ
高くとそかに而して
くぐるに出ずいつくふ出ずや文
梅ヶ谷横州宮の姫湯
に国花万紫紅といふ
十年伊豆河内守いへふ
さるに
共底口のもの
すその浅橋戸国の人
名を

彼の医のいふ底のさう丸外に今くいえさうなり仰れども
用尚石治移毒骨を以て治へつぶ故この病となん
あるうとてまた和のうく切かたまり病口と洗ひ薬を
付し接合して扨奶湯と写ふくれぎうけしが
日向ひして底なう底なう老の後までも再ひいさ
まびしでそ寄ものが医ものうけたりのうあびと又
奶湯の手特なりべ此山地獄の湯も用方はうべ名れ
や接人寄ものがやまきなし可信この湯はうてこの医
なきまうな

筥根七湯菜六の巻〻早